



Empty Coffin

新クトゥルフ神話TRPG シナリオコンテスト2025 佳作 英雄の棺は、空だった。

棺にいたはずのものと時空の彼方から訪れる怪物が、時を超えて交差する。

ひで

概要

舞台は1926年5月、スコットランドの小さな農村。採石工事中の発破作業により、沼地の縁に埋もれていた石碑が露出し、奥のストーン・サークルが見つかる。

調査に赴いた探索者は、石碑に刻まれた怪物に強い不安を感じる。石碑上部には日付を示すローマ数字が刻まれているが、一部が削れて判別できない。

一方、村の教会では祭壇前の床下から空の石棺「英雄の棺」とゲール語の書籍が発見されていた。これらを手掛かりに調査を進める中、探索者の前に「むし」の群体「このもの」が現れる。このものは926年、邪神を呪文《時空の落とし穴》で1,000年先へ追放した魔術師その人だった。

探索者はエディンバラ大学の研究者から呪文の翻訳を手に入れる。そしてバオート・ズックァ＝モグが出現する午後11時、ストーン・サークルで神格を時のかなたへ送るか、または貴重な遺跡を犠牲にするかの選択を迫られる。

舞台は1926年イギリス、スコットランド東部の農村アベルムノ。探索者は依頼を受け、採石工事によって見つかった石碑とストーン・サークルの調査に赴く。忍び寄る影と歴史に埋もれた恐怖が村で待っている。

Introduction

1. はじめに

このシナリオは“新クトゥルフ神話TRPG ルールブック”（以下“ルールブック”）と“新クトゥルフ神話TRPG マレウス・モンストロルム Vol.2 神格編”（以下“神格編”）に対応しており、作りたての探索者3～4人向けにデザインされている。プレイ時間は探索者の作成時間を含まずに4～5時間程度だろう。

本シナリオは村および周辺を舞台にしており、探索者が村に到着した日から数えて3日目の午後11時にストーン・サークルに神格が出現する。キーパーは探索者が村に到着した日時をプレイヤーへ明確にし、石碑や出現の予兆で危機感を持たせよう。NPCのこのものは意思疎通が困難だが、事件解決の手掛かりを探索者に示せる。

導入で遺跡の学術調査を依頼されるため、探索者に考古学の教授が1人以上は必要だろう。〈鑑定〉、〈考古学〉、〈歴史〉が得意な探索者がいれば活躍の機会があるはずだ。

Keeper Information

2. キーパー向け情報

西暦926年、アルバ王国（現スコットランド）東部のアベルムノの集落では、春から疫病と深刻な虫害が広がっていた。高熱とせきで人が倒れ葬儀も追いつかない。沼地から湧いた虫が畑を荒らし家畜を弱らせる。原因は沼地に現れたバオート・ズックァ＝モグ（“神格編”200ページ）だ。

アルバ王より疫病退散、虫害調伏の任を受けた魔術師は、神格を討伐できぬと悟った。魔術師は集落の人々と協力してストーン・サークルへ誘導し、そこで呪文《時空の落とし穴》（“ルールブック”257ページ《時空門》のバリエーション）により神格を1,000年先へ追放した。魔術師自身も未来へ危機を伝えるため、呪文の巻物を携えて石棺に入り、神格より2か月早く到着するよう時間跳躍した。

集落の人々は魔術師の言い付けに従いストーン・サークルの入り口に警告の石碑を建てた。さらに未来において魔術師が現れる石棺を覆うように、ケルト系キリスト教の祭

壇と礼拝堂を建て、由来を書籍や伝承として残した。

1,000年後の1926年、礼拝堂はプロテスタント系の教会に建て替えられ、工事の際に見つかった石棺と書籍は村の民俗資料館へ移された。時間跳躍した魔術師は土に固められた空間の中で圧死した。彼の体は土中の蟲に食われ、精神だけが蟲に刻まれ、這うもの（“ルールブック”296ページ）として、神格が出現する3日前に誕生した。

またアベルレムノ村の南にそびえる丘の斜面では、建設会社による採石工事が行なわれており、発破作業で沼地の縁に埋もれていた警告の石碑が露出、沼地奥のストーン・サークルが発見されていた。

探索者が村に到着した日から3日目の午後11時にバオート・ブクァーモグが出現する。這うものとなった魔術師は蟲の群体となりながらも、ストーン・サークルに現れる危機を伝えようと探索者に接近する。

スコットランド・ゲール語、本シナリオ上の設定

本シナリオでは失われつつある言語、スコットランド・ゲール語（以下ゲール語）が登場する。ゲール語の判別や理解は、〈ほかの言語〉についての提案（“ルールブック”73ページ）を採用する。

ゲール語はラテン文字（アルファベット）で表す言語で、西暦500年ごろ、アルバ王国の中心言語になり、その後約1,000年使われてきた。

しかし1920年代にはゲール語はスコットランド北部や島しょ部にわずかに残るのみで失われつつある。英語とゲール語は文法や単語、発音規則が違うため文字でゲール語だと判別できても内容は理解できない。そのため大学などではゲール語の研究、保存活動が行なわれている。

アベルレムノ村でゲール語を理解する村人がいる確率は1%とする。〈考古学〉、〈歴史〉、EDUロールのいずれかに成功すればゲール語と判別ができ、〈ほかの言語（ゲール語）〉に成功すれば意味もわかる。

探索者がスコットランド北部や島しょ部出身の場合、この言語話者の地域差から〈ほかの言語（ゲール語）〉の基本成功率を20%としてもよい。

Player Information

3. プレイヤー向け情報

1920年代イギリスの農村の様子

暮らしは酪農や畑仕事、羊の放牧など第一次産業が中心だ。第1次世界大戦は終わったものの、若い男を多く失った村では「戻らなかった家族」の話が今も生々しい。都市では自動車やジャズなど近代文化が広がる一方、村は保守的で、教会と長老の意見が重んじられる。電気や電話は一部にある程度で、夜は灯油ランプと暖炉が頼りの家も多い。

ロンドンから村までの道のり

ロンドン在住の探索者なら早朝に出発し、アベルレムノ村への到着は夕方以降となる。ロンドンのキングス・クロス駅からエディンバラまで急行列車で約8～9時間。そこからアンガス地方行きへ乗り継ぎ、フォーファーへ約2～3時

間かかる。フォーファー駅前で自動車か荷馬車を手配し、村まで約10km、自動車なら30分とかからない。

NPCs

4. 主なNPC

這うもの

10世紀のアルバ王国で将来を嘱望された若き魔術師。王国に忠誠を誓い民を助けたため人気は高いが、王には疎まれていた。疫病と虫害をもたらす神格を追い、1,000年の時を超えてきた。

容姿の描写：ウジ、ハエ、クモ、ゴキブリなど死肉を食べる蟲が群体となり人型を形づくり、のたうつ。

特徴：責任感が強く探索者への協力を惜しまない。

ロールプレイの糸口：発声できないが身ぶりや絵、文字などで探索者の注意を引き、危機を伝え、術の手掛かりを示し、時として守ろうとする。呪文は使えない。人間に攻撃されると散り散りになって逃走する。

この這うものは10世紀のアルバ王国の人間であるため、ラテン語とゲール語、ローマ数字（III、XXIIIなど）はわかるが、英語やアラビア数字（1、3、5など）は知らない。

這うもの、探索者に警告する10世紀の魔術師

STR 45 CON 70 SIZ 65 DEX 35 INT 70
APP 該当なし POW 20 耐久力 13

DB：+0 ヒルド：0 移動：8

1ラウンドの攻撃回数：1（素手）

近接戦闘（格闘）35%（17/7）、ダメージ 1D3+DB
素手もしくは武器による
回避 20%（10/4）

装甲：這うものは体が柔らかく弾力があるため、通常の武器では最小限のダメージしか与えない。弾丸は1ポイントしかダメージを与えず、ショットガンならその種類の最小限のダメージを与える。

主な技能：隠密 60%、母国語（ゲール語）90%、ほかの言語（ラテン語）80%

正気度喪失：這うものと遭遇して失う正気度ポイントは1D3/2D6。

Get Starting

5. シナリオの導入

1926年5月初旬、探索者がオフィスや自宅で新聞を開くと、「ストーン・サークルを新発見、アベルレムノ近郊で」と題した新聞記事が目にとまるかもしれない。

記事によれば、スコットランド東部アベルレムノ村近郊で4月末、採石工事中にストーン・サークルが発見されたという。ダイナマイトを用いた採石工事を中止し、学識者による現地調査と詳細報告が必要と記事では結んでいる。

探索者が考古学者なら、建設会社から以下の依頼（プレイヤー資料1「建設会社からの手紙」）が来る。

弊社がアベルレムノ村近くで採石工事中、沼地より石碑ならびに環状列石遺跡を発見致しました。この遺跡の調査、報告書作成を急ぎ依頼したく、連絡差し上げます。

謝礼は相場以上にて、旅費、宿泊費は弊社負担。調査団の編成もなにとぞお任せしたく……。

(英雄の棺は、空だった。
プレイヤー資料1「建設会社からの手紙」)

5月9日、建設会社は探索者を臨時の調査団として雇い、ロンドン本社で面談する。依頼は、5月16日の工事再開までに遺跡の写真撮影や測量などの現地調査を行ない、学術会議に提出する報告書をまとめることだ。

報告書提出が工事再開の条件であるため、同社役員は期限の短さをわびて高額の謝礼と旅費、宿泊費の負担を提示する。工事は中止しているが現地には作業員を1人残してある、とも伝える。

Investigations

6. アベルレムノ村についての調査

探索者が図書館や新聞社、村での聞き込みなどで得られる情報を示す。考古学者なら「ピクト石」の基礎知識を持っていてよい。キーパーは探索者の行動に応じて、以下を開示しよう。

- ストーン・サークルがこの地域で見つかるのは初めてだが、驚きではない。もともと先史時代の遺跡が多い地域だ。
- アベルレムノ村には、6〜8世紀ごろにいたピクト人が作った「ピクト石」が4つ残っている。不思議な記号、十字架、狩りや戦いの場面などが彫られ、当時の暮らしを知る手掛かりになる。特に教会墓地のピクト石「戦いの絵」は有名だ。
- 村では最近、「英雄の棺」なるものが見つかった。採石場の建設会社が半年前に古い礼拝堂を改築して教会を建てた際、祭壇前の床下から空の石棺と古い書籍が出てきた。
- 建設会社は王室から信頼される歴史ある会社で、バックingham宮殿の修復工事も請け負っている。
- 村の南の採石場は約2年前に見つかった。加工しやすく風雨にも強い上質な砂岩が採れる。

Crawling Ones

7. 這うもののふるまい方(探索者への接し方)の提案

1,000年前から来た魔術師(這うもの)は危機を伝えるため探索者の前に繰り返し現れる。初遭遇で緊張感を持たせたいのなら、最初は戦闘ラウンドとして扱ってもよい。キー

出現時間の特定と翻訳手段、時間の制約

事件解決には、神格の出現時刻を特定し、それまでに必要な準備を整える必要がある。鍵となるのはゲール語の翻訳と、残り時間の把握だ。

村にはゲール語辞書はないが、大学では研究が行なわれていると探索者は気づいてよい。民俗資料館には翻訳につながる手がかりがある。翻訳手段に迷うなら、EDUロールやINTロールの成功で、エディンバラ大学なら研究者がいるはずと示唆しよう。

時間管理は厳密でなくてよい。キーパーは「現在時刻」の目安(例：お昼前なので午前11時ごろ)を都度、プレイヤーと共有しよう。シナリオ内で一定の時間経過が伴うものを以下にまとめる。

- アベルレムノ村とエディンバラ間：片道3〜4時間
- ストーン・サークルと村の入り口まで：1時間(徒歩)
- 《時空の落とし穴》の習得：1D3時間
- 《時空の落とし穴》の穴の創造：さまざまな時間

パーは、這うものが探索者に何かを伝えようとしていることがわかるように演出しよう。

- まずは分身のハエやクモなどで様子を探ろうとする。敏感な探索者なら虫が探っている気配に気づくかもしれない。
- 調査が進むと、人型となって現れ危機を伝えようとする。探索者がおびえる様子ならば、次からは牧師の服を盗み体を隠すなど、工夫するだろう。
- ゲール語、ラテン語、ローマ数字を書いたり、身ぶりでも探索者と意思疎通を試みる。意思疎通できれば神格が出現する日時もローマ数字で探索者に伝えようとするだろう。
- 探索者を教会裏に誘導し地中の巻物を掘り起こさせようとする。
- 探索者がゲール語を解説できず、呪文《時空の落とし穴》の習得が進まない場合、クトゥルフ神話的存在から呪文を習得する方法(“ルールブック”173ページ)で探索者を救済してよい。這うものは探索者を抱きしめ呪文を心に吹き込む。探索者はその抱擁のおぞましさに1D6正気度ポイントを失い、さらにINTロールに成功すれば呪文を習得できる。

Aberlemno Village

8. アベルレムノ村

探索者は目的の村（プレイヤー資料2「アベルレムノ村の地図」）に到着する。キーパーは到着日時をプレイヤーに明確にし、以下の文を適宜読み上げること。

丘陵と畑のあいだに、石造りの家々が肩を寄せる小さな村が見える。すすけた煙突から薄い煙が立ち、湿った土と家畜のにおいが風に混じる。教会の鐘が低く響き、よそ者を測る村人たちの視線が静かに集まってくる。

パブ兼宿場

低い天井の石造りのパブは2階が宿場になっており、暖炉の火と麦芽のにおいに満ちている。黒ビールをすすりつつ、村の年寄りは探索者の素性を知りたがる。

村人はストーン・サークル発見を「観光名所になるかもしれない」と喜んでいる。採石場について尋ねれば、「工事が急に止まって若者がいなくなった」と寂しそうだ。

探索者が村人の相手をしていると、一人の老人が朗々となじみのない言葉で歌い出し、やがて酒場中が唱和する。〈考古学〉、〈歴史〉、EDUロールのいずれかの成功で歌詞はゲール語かもしれないと思いつくほか、〈ほかの言語（ゲール語）〉の成功で意味もわかる。

歌について尋ねれば、老人は村に伝わる古いゲール語のわらべ歌だとし、意味を教えてくれる（プレイヤー資料3「きみがえいゆう」）。老人自身はゲール語を知らないが、この口伝の歌は村の人間なら子供でも歌えるらしい。この歌は1,000年前の人々が警告として残した伝承が、長い年月のうちにわらべ歌になったものだ。

村役場・民俗資料館

古風な石造りの村役場で役人が書類をめくり、掲示板には採石工事中止のお知らせがくぎで留められている。併設された小さな民俗資料館は古い紙とインクのにおいが漂う。

民俗資料館の受付の机には来館帳があり、奥には農具や馬具、骨董品の鉄筆とろう板などが雑多に並ぶ。片隅には図入りでピクト石の解説板があり、「この地は古くから文化

むかしむかしの てんしのわ
いっせんねんを こえていけ
やまいとむしの ばけものぞ
まもるはおいのり ただひとつ
たたえよそなえよ こえをきけ
きみがえいゆう たちあがれ

（英雄の棺は、空だった。 プレイヤー資料3「きみがえいゆう」）

アベルレムノ村と採石場 MAP

畑や牧草地を含めた「村の範囲」：縦横 2～3km
採石場は村から徒歩で40分ほどの距離



（英雄の棺は、空だった。 プレイヤー資料2「アベルレムノ村の地図」）

の中心だった」と説明している。

柵の中には「英雄の棺」と題された長さ約2mの空の石棺と、「準備中」の張り紙がされた大きな空の本柵が展示されている。石棺は赤茶けた石材が使われ木製のふたは外されて横に立てかけてある。石棺の側面には「CMXXVI」とあるほか、アルファベットで見慣れない単語が書かれている。

教養ある探索者ならば「CMXXVI」がローマ数字の「926」だとわかるだろう。キーパーはEDUロールの成功でプレイヤーにローマ数字の意味を伝えてもよい。見慣れない単語は〈考古学〉、〈歴史〉、EDUロールのいずれかに成功することでゲール語だと判別できるほか、〈ほかの言語（ゲール語）〉の成功で「英雄の棺」という意味もわかる。

探索者が石棺を見ていると役人が近づき、半年前に礼拝堂を建て替えた際、祭壇下で見つけたと紹介する。役人は「大学の先生によればゲール語は『英雄の棺』という意味だそうです」とも教えてくれる。大学の先生とはエディンバラ大学のイアン・マクラウド教授のことだ。来館帳には約半年前に来たマクラウド教授の名前が記載されている。石棺やふたを調べると以下のことがわかる。

- 木製のふたは軽く、金具や錠前がない。単にふたを乗せるだけの構造になっている。〈鑑定〉か〈考古学〉の成功で木製のふたは1,000年程度前のものだとわかる。
- POWが70以上の探索者、もしくはPOWロールに成功した者は棺の中から強い魔術の名残を感じて恐怖し、0/1D2正気度ポイントを失う。
- 〈鑑定〉か〈考古学〉の成功で石棺が1,000年程度前のものであること、内部は清潔に保たれており、何も入っていないことがわかる。
- 〈科学（地質学）〉、〈鑑定〉、〈考古学〉のいずれかの成功で石棺の材質がピクト石と同じ砂岩であることがわかる。

空の本柵のことを役人に尋ねれば、石棺と一緒に約50冊のラテン語やゲール語らしき書籍が出たため、すべてをエディンバラ大学のマクラウド教授の元で調査してもらっていると教えてくれる。

教会と教会墓地

新築のプロテスタント教会は石肌がまだ白く、塗料のにおいが残る。隣の墓地では墓標が霧に沈み、奥に「戦いの絵」のピクト石が鈍く光っている。中には牧師が1人いる。

牧師は誇らしげに、新しい教会は約半年前に採石場の建設会社が寄付で建て替えたと話してくれる。その際に見つかった古い石棺と大量の書籍は村役場の民俗資料館に移したとも教えてくれるだろう。旧礼拝堂について牧師が知るのは「約1,000年の歴史があった」程度で、建設会社については「村に繁栄をもたらす」と好意的だ。

墓地の隅

こげに縁取られた灰色のピクト石が立っている。刻まれた「戦いの絵」には槍、馬、人影が描かれ当時の戦いを表している。探索者は〈目星〉のハード以上の成功で、教会裏からかすかな腐臭を感じるかもしれない。

教会裏

〈目星〉に成功すると腐臭を感じる。調べれば新しい土台の下からミミズやウジが這い出している場所に気づくだろう。その下を約2m掘り起こすと、ぼろをまとった人骨と群がる蟲、土まみれだが真新しく頑丈な羊皮紙の巻物が見つかる。探索者は異様な光景に0/1D3正気度を失う。

〈医学〉の成功で人骨は成人男性、つぶれたことによる損壊と、死亡推定時期が約2か月前ということがわかるだろう。この骨は這うものとなった魔術師のものだ。

巻物は真新しいが〈鑑定〉、〈考古学〉、〈歴史〉のいずれかの成功で約1,000年前の製法であることがわかる。巻物をひも解いて〈考古学〉、〈歴史〉、EDUロールのいずれかに成功することでゲール語で書かれていると判別でき、〈ほかの言語（ゲール語）〉に成功すれば内容も理解できる。巻物には警告（プレイヤー資料4「ゲール語の巻物」）と呪文《時空の落とし穴》が記述されている。このプレイヤー資料と囲み記事の内容は、ゲール語が翻訳できたあとでプレイヤーに渡すこと。

郵便局

村の郵便局は石造りの小さな建物で、窓口の真ちゅうが磨かれて光っている。柵には小包と封書が積まれ、電話機の横で丸眼鏡の局員が消印を押している。

商店

食料や医薬品、日用雑貨などが購入できる。スコープなど穴を掘る道具もあるだろう。探索者が必要なものはキーパーの判断でここで購入できることにしてよい。

採石場と宿舎・倉庫

採石場は岩肌が露出しちりやほりが舞っている。古いトラックのそばに割れた石と折れた杭、つるはし、ダイナマイトの紙くずが散らばる。宿舎は粗い板壁で、中では油の染みた寝台に作業員が寝ている。

採石場

切り立つ岩壁で、赤褐色の硬い岩山が見える。〈科学（地質学）〉か〈鑑定〉の成功で、岩山は硬い砂岩層であることがわかる。また〈考古学〉か〈歴史〉の成功で、この砂岩がいくつかのストーン・サークル、またピクト石にも使われていたことを思い出す。

作業員

露出した石碑とその奥のストーン・サークルを見つけた当人であり、今は1人で留守番をしている。彼は石碑に刻まれた怪物におびえ、ストーン・サークルでは異様な気配を感じて、二度と近づきたがらない。彼は倉庫とトラックの鍵を厳重に管理しているほか、〈電気修理〉70%、〈爆破〉60%の技術者だ。

倉庫

頑丈な鍵が掛かっており、〈鍵開け〉のハード以上の成功、または作業員の鍵で開けられる。中にはハンマーやつるはし、縄、麻袋のほか、壁際に導火線（合計約300m）のリールが

掛けられ、左隅にダイナマイト、反対側に信管がそれぞれ1ダース保管されている。

石碑

採石場を抜け沼地に続く小道の先に、露出した石碑がある。以下の描写を適宜読み上げること。

石碑には、巨大なかき爪とサソリの尾を持ち、ぶ厚い甲殻に覆われた異形の怪物が彫られている。

石肌からはまるで腐臭と不吉がにじみ出してくるかのようだ。

上部には区切りを入れた文字列が刻まれているが、一部が欠けている。

石碑に彫られた怪物の生々しい造形に探索者は0/1D4正気度ポイントを失う。石碑を調べると以下のことがわかる。

- 石碑は高さ約2m、幅約1mで、約30cmの分厚さがある。
- 上部に「MCMXXVI・V・××・XXIII」と刻まれている。この文字はローマ数字の1926・5・××・23だと教養ある探索者ならばわかるだろう。キーパーはEDUロールの成功でプレイヤーにローマ数字の意味を伝えてもよい。××には探索者が村の到着から3日目の日付を意味するローマ数字が刻まれていたが破損している。
- 石碑の裏には2つの言語の文章が刻まれている。〈考古学〉、〈歴史〉、EDUロールの成功でゲール語とラテン語だと判別できる。〈ほかの言語（ゲール語）〉、〈ほかの言語（ラテン語）〉の成功で、2つの文章がそれぞれ「疫病と蟲の邪神に備えよ」と読める。
- 〈科学（地質学）〉、〈鑑定〉、〈考古学〉のいずれかの成功で石碑が約1,000年前のもので、材質がピクト石と同じ砂岩であることがわかる。

ストーン・サークル

探索者は小道を通って森の中のくぼ地でストーン・サークルを見つける。以下の描写を適宜読み上げること。

木立が途切れ、森のくぼ地に円形の空間が口を開ける。くぼ地の底に鎮座するストーン・サークルは、外界から隔絶されたように静寂に包まれていた。こけむした巨石が輪を描き、正面にある2つの石だけが門のように間が空いている。

考古学者なら、風雨にさらされた遺跡とは異なり、ストーン・サークルがこれほど良好な状態で残る例は歴史上初めてだと感動するだろう。一方でPOWが70以上の探索者、またはPOWロールに成功した者はストーン・サークルから怪しい魔術の名残を感じ、0/1D2正気度ポイントを失う。

ストーン・サークルを調べると以下のことがわかる。

汝らに警告する。われらは926年、古代の石の輪で、疫病と蟲の邪神を1,000年の未来に追放した。軽んずるな、よくよく思案し備えよ。われらが英雄の言葉を聞け。それは未来を守る祈りの術。汝らこそが次の英雄となるのだ。

(英雄の棺は、空だった。 プレイヤー資料4「ゲール語の巻物」)

新しい呪文《時空の落とし穴》 “ルールブック”257ページ《時空門》の バリエーション

コスト：さまざまなPOWやマジック・ポイント
必要時間1（穴の創造）：費やすPOW 5ポイントごとに1時間
必要時間2（穴の活性化）：1ラウンド

未来や過去につながる落とし穴を石で囲われた場所に創造し、穴を活性化させる呪文。対象は時間を超え、石がなくても同じ場所に出現する。

《時空の落とし穴》はすぐ使用できるようわかりやすく記述されており、1D3時間で習得できる。またPOWとマジック・ポイントは術者で分け合うことができる。

消費するPOWとマジック・ポイントは、表「時空の落とし穴の創造と穴の活性化コスト」を参照。

表：時空の落とし穴の創造と 穴の活性化コスト

POW (穴の創造)	マジック・ポイント (穴の活性化)	時間の限度 (未来あるいは過去へ)
5	1	1時間
10	2	1日
15	3	1週
20	4	1月
25	5	1年
30	6	10年
35	7	100年
40	8	1,000年
45	9	1万年
50	10	1,000万年
55	11	1億年
60	12	10億年
65	13	100億年
70	14	1,000億年

別名：時の落とし穴、時空の罠

- ストーン・サークルの直径は約10m、約2mの高さの石柱が13本、正面の入り口部分を除き、ほぼ等間隔で並んでいる。採石工事による破損はない。
- 石柱を詳しく調べると〈科学（地質学）〉、〈鑑定〉、〈考古学〉のいずれかの成功で、石柱はいずれも赤茶けた砂岩で、ピクト石などと同じ石だということがわかる。
- 〈科学（地質学）〉、〈鑑定〉、〈考古学〉のいずれかのハード以上の成功で石柱はスコットランド北部などにあるストーン・サークルと同様に、紀元前3,500年から紀元前1,000年の間に作られたものであると推測できる。
- サークル中央の植生は周辺と同じで、土を掘っても特に不審なものは見つからない。

這うものの最初の出現について

初遭遇の場面に迷うなら、ストーン・サークルを調査した帰りの小道で出現させるとよい。以下はその描写だ。この出会い以降、這うものは繰り返し意思疎通を試みる。

村へ戻る小道。探索者の足元や草むらから、ハエやクモがぞろりと這い出す。前方や左右からもウジ、ハエ、クモ、ゴキブリが集まり、やがて蟲の塊が人型を形作っていた。空洞の口をばくばくさせ、両腕を広げ近づいてくる。

初めて這うものに会った探索者はおどましすぎる姿に、1D3/2D6正気度ポイントを失う。這うものは探索者と意思疎通できないと知ると、散り散りになって逃げる。

バオート・ブクァ＝モグ出現の予兆

出現当日の朝から、昆虫や害獣がストーン・サークルへ吸い寄せられ村でも異常が起きる。キーバーは以下の描写などで時間が迫っていることをプレイヤーに印象づけよう。

- 朝、空が黒い点で覆われる。ハエの群れが日差しを遮りつつストーン・サークルへ飛んでいく。
- 麦畑に黒いイナゴが群がっている。追い払えば黒いイナゴの群れはストーン・サークル方面へ飛び去る。
- 犬が空中を囁くようにほえ続け、やがて泡を吹いて倒れる。〈医学〉の成功で大量の蜂に刺されているとわかる。
- 子どもが泣き叫んでいる。視線の先には大量のネズミに襲われ血まみれになって死んでいる猫の死骸がある。

The University of Edinburgh

9. エディンバラ大学 (スコットランド・エディンバラ)

エディンバラ大学にはゲール語の復興、保存に携わる文学者、イアン・マクラウド教授がいる。探索者が電話で連絡するか、直接大学を訪ねて受付で「村で発見された書籍」の件を告げれば、教授は「すぐ会いたい」と強く求める。

マクラウド教授と面談する

教授は高齢で足が悪く、興奮と疲労で取り乱している。落ち着かせると、書籍と完成したばかりの翻訳文を示し、早口以下を伝える。

- 礼拝堂の祭壇下から出た約1,000年前の書籍を精査した。大半はラテン語のアルバ王国史で既知の内容だった。
- ただし、ラテン語とゲール語で書かれた驚くべき『疫病と蟲の邪神の記録』を見つけ、不眠不休で翻訳した。
- 記録によれば、王国の魔術師は926年5月××日午後11時、ストーン・サークル中央で邪神を呪文により1,000年先へ追放した。未来に危機を伝えるため魔術師自身も石棺に入り同じ呪文で時を超えた。
- 記録は1,000年後の同日同刻に邪神が現れることを示唆している。すなわち1926年5月××日午後11時だ。(××は探索者が村に到着してから3日目の日付)。
- 邪神は約4m。記録には「剣や槍などわれらの武器では容易に傷つかぬ外殻で覆われ、大量の害虫を呼び、腫れ物から猛毒の膿汁が飛沫のように散る」とある。
- 結びに「遠い未来、この邪神を退治できる英雄が現れることを願う」とある。

教授は警告と呪文《時空の落とし穴》の翻訳文（プレイヤー資料4「ゲール語の巻物」、および囲み記事《時空の落とし穴》の内容）を探索者に渡す。その後、過度の疲労と錯乱で倒れ、医師は数日の安静が必要と診断する。歴史に埋もれた恐怖の全容に触れた探索者は0/1D2正気度ポイントを失う。

Climax

10. クライマックス：バオート・ブクァ＝モグの出現

1926年5月、探索者が村を訪れて3日目の午後11時、バオート・ブクァ＝モグがストーン・サークルに出現する。以下の描写を適宜読み上げること。

午後11時。ストーン・サークルの空気が腐った水のようになく沈み、石の内側に霧が渦を巻く。耳を刺す羽音と這う音、泥と汚物の臭気が一斉に満ちる。

中心で闇が裂け、黒緑色の外殻に覆われた巨体が押し出された。球根状の頭に黄色い無数の目。巨大なかぎ爪がきしむ、サソリの尾が清く反る。三対の角ばった翼が震え、腫れ物の粘液が滴り、害虫と害獣が群がって石の輪を黒く埋め尽くしていく。

バオート・ブクァ＝モグ

バオート・ブクァ＝モグはストーン・サークル中央に出現する。出現直後の1ラウンドは動かず、次のラウンドから自分に干渉した者を攻撃する。探索者が出現時刻や猛毒の膿、装甲を把握していれば対策を考えられるだろう。た

だし準備できる内容は残り時間の制約を受ける。神話存在としての詳細は“神格編”200ページの「バオート・ズックア＝モグ」を参照。

神格を退ける方法はさまざまであり、例として以下を挙げる。

貫通武器、爆発物で耐久力を削る

装甲を上回る攻撃で耐久力58を削り切る必要がある。距離が10m以内の場合、爆発で猛毒の膿の飛沫を浴びる可能性がある。爆発はストーン・サークルも破壊するだろう。

呪文《時空の落とし穴》で未来や過去に追放する

呪文は穴の創造に一定時間が、穴の活性化に1ラウンドが必要なことに注意。1日跳ばす穴の創造でさえ2時間の準備がある。初めて試みる《時空の落とし穴》では一定時間の詠唱後、キャスト・ローリング・ロール(“ルールブック”173ページ)を穴の創造時に行なう。この呪文はPOWを消費する強力な呪文であり、必要なら這うものは自分のPOWを提供する。

準備期間を確保し、呪文と貫通武器の両方を使う

準備が不十分なら、神格をいったん未来へ送り、その間に態勢を整える手もある。耐久力を削り切れなかった場合も同様だ。探索者自身が過去に戻り、十分な準備をして当日を迎える方法も考えられる。

ストーン・サークルを破壊する

ストーン・サークルを事前に破壊しようとする探索者もいるだろう。しかし魔術師が這うものになった経緯や、《時空の落とし穴》を理解すれば、石を破壊しても出現は止められないことがわかるだろう。

バオート・ズックア＝モグは4ラウンド目を迎えると突如、巨体を宙へ持ち上げ、南へ飛び去る。あとには粘液の中でもがく害虫や害獣の大群と、腐臭だけが残る。

どんな結末であれ、這うもの、王国の栄えある若き魔術師だった男は力尽き、ストーン・サークルのそばで蟲の残骸となる。

The Conclusion

11. 結末

探索者がバオート・ズックア＝モグを逃した場合、この神格は村に深刻な虫害をもたらし、農業、酪農に長期のダメージを与えた上、エディンバラでは疫病で数千人が死亡する。探索者は後悔から1D10正気度ポイントを失う。

バオート・ズックア＝モグを退けた場合でも、貴重なストーン・サークルを破壊してしまった探索者は1D2、特に考古学者ならば1D4+1正気度ポイントを失う。

依頼があった学会会議に提出する報告書は、〈考古学〉に成功すれば十分なものとなる。〈芸術／製作(写真術)〉にも成功すれば、建設会社はさらに高く評価するだろう。

探索者は926年のアベルレムノの集落の疫病や虫害、魔術師の史実を既存の文献で調べるかもしれない。約1年の研究

典型的な顕現：バオート・ズックア＝モグ

STR 175 CON 380 SIZ 200 DEX 80

- ・耐久力：58
- ・ダメージ・ボーナス：+4D6
- ・ビルド：5
- ・移動：8／穴を掘る 6／飛行 16

戦闘

1ラウンドの攻撃回数：2(かぎ爪、顎)または1(尾の毒針)
2つあるかぎ爪と顎で攻撃するか、尾を使って毒針で刺すことができる。

尾の毒針：命中すると[1D6+4]ポイントのダメージと毒の効果を与える。犠牲者がイクストリームのCONロールに失敗すると、1D100分後に苦痛に満ちた死を迎える。ただし、素早く処置して、ハードの難易度で〈応急手当〉か〈医学〉ロールに成功すれば、死ぬのを阻止できるが、犠牲者は2D10ポイントのCONを永久に失う(イクストリームで成功すれば、これらのダメージはすべて無効化できる)。

近接戦闘 90%(45/18)、ダメージ 4D6

尾の毒針 60%(30/12)、(上記参照)

装甲

- ・15ポイントのキッチン質の外皮。
- ・普通の非貫通武器はダメージを与えない(弾丸などの貫通武器はダメージを与える)。
- ・耐久力がゼロに達すれば、バオート・ズックア＝モグは突然溶けて、ねばねばとした黒い液体に変わる。その液体の中には、腐肉にたかる虫などの不快なものがたくさんいるが、すぐに地面の中へと染み込んでいく。バオート・ズックア＝モグは地球以外のどこか別の場所で1D4年後に姿を取り戻す。

の末、〈考古学〉、〈図書館〉、〈歴史〉のいずれかの成功で、資料に不自然な欠落があることに気づくだろう。これは当時のアルバ王が、英雄として人気のあった魔術師に嫉妬して史実を抹消したためだ。

報酬

危機を乗り切った探索者は1D10正気度ポイントを獲得する。未来に送った場合、警告や準備など再出現への備えまで整えたのならボーナスとして+1D4正気度ポイントを獲得する。